

ICMF '91 Győr に参加して

宅 田 裕 彦

京都大学工学部 工博

第 15 回日向方学術振興交付金により、筆者はこの会議 (International Conference on Metal Forming) に参加する機会を得たことを付記します。この会議は、'79 年以来 3 年ごとにハンガリーで開催され今回が第 5 回になるが、筆者がこの会議の存在を知ったのは、昨年京都で開催された 3rd ICTP 席上、ハンガリー人参加者から聞いたのが初めてであった。

開催地 Győr (ジェル、ドイツ語圏ではギェールと呼ぶ。他にドイツ語名もある) は、人口約 20 万人のハンガリーで 6 番目に大きい町で、ブダペストとウィーンのちょうど中間に位置し、チェコスロバキアとの国境にも近い。大戦後たまたま東側となったために遠く感じられていたが、このあたりはもともとウィーンを中心とする文化圏にあったわけで、例えば音楽の世界では、レハールやカールマンなどウィーンで人気の高いオペレッタ作曲家が多くハンガリーから出ている。鉄道を例にとってもジェルは、ブダペストよりも先にウィーンと結ばれた。現在、ジェルを通過してウィーンとブダペストを結ぶ急行列車は 1 日 10 本 (上下で計 20 本) あるが、その列車に先ほどのレハール号、カールマン号やバルトーク号、リスト号といったハンガリーを代表する音楽家の名前をつけているところが、またおもしろい。

このようにハンガリーはドイツ語文化圏と密接な関係があることも一つの事実だが、しかし行って見て驚いたことは、ハンガリー語 (マジャール語) である。この言葉は英語やドイツ語の知識では全然理解できない。例えば、オランダに行って聞こえてくる言葉は、ドイツ語の一つの方言にしか聞こえないくらいよく似ているし、英語だってドイツ語に近い。しかし、ハンガリー語は全く別のものである、ということが実感としてよくわかった。

そして会議では、なんとハンガリー人はハンガリー語で、ドイツ語圏の人はドイツ語で、その他の国の人は英語で発表し、この三つの言葉の間に同時通訳がつくという方式であった。筆者は、しかし、この方式にはあまり

賛成できない。よほど同時通訳がしっかりしていたとしても、ダイレクトなコミュニケーションほどうまくいかず、どうしても質疑応答が不活発となりがちであった。また、同時通訳者のレベルは、もちろん個人差があるので一概には言えないにしても、英語の通訳者の能力はドイツ語のそれよりもかなり劣っていたようだ。筆者も、したがって、イヤホンではドイツ語にダイヤルを合わせて聞いた。

会議は、6 月 19~21 日の 3 日間、市内のラーバ川とモショニドナウ川のおだやかな流れが合流する地点に近い、落ち着いた環境のジェル交通通信大学の構内で行われた。参加者は 150 名程度だったが、参加者名簿が配布されなかったため、国別参加人数はわからない。ただ一つ言えることは、日本からの参加者は筆者 1 人であったということである。一般講演は二つの会場で並行して行われたが、その国別件数を見てみると、ハンガリー 29 件、ドイツ 8 件、チェコスロバキア 8 件、ソ連 4 件、ルーマニア 4 件、イタリア 3 件、カナダ 3 件、イギリス 2 件、ポーランド 2 件、ユーゴスラビア 2 件、中国 1 件、日本 1 件の計 67 件である。分野別でみると、板材成形が最も多く 28 件、材料関係が 14 件、CAD/CAM 関連が組織委員長 Dr. TISZA の専門でもあり比較的多く 10 件、基礎理論が 5 件、潤滑が 4 件、その他が 6 件であった。1 件当たり 25~30 分の時間が与えられ、十分な発表が行えた。外国人組織委員の中には、日本でもおなじみのドイツのランゲ教授や、ガイガー教授、イタリアのバリアーニ教授、カナダのレナード教授の名前がある。なお、パーティーの席上、ランゲ教授から日本の塑性加工関係の皆様によろしくとの伝言を承った。

初日の夜には、市庁舎で市長からの歓迎の挨拶とともに小さなパーティーのあと、コンサートが催された。クラリネット 5 重奏団によるものであったが、そのコンサートの休憩時間に、ジェル市のローマ時代からの歴史についての説明があった。先に述べた鉄道がウィーンから先に開通したというような話は、このとき聞いたものであり、なかなかおもしろかった。

会議終了後、ウィーンを経由してミュンヘンまで足を延ばし、筆者のかつての留学先であるミュンヘン工科大学の人々と旧交を深めることができたことも、筆者にとって幸いであった。

